

## 「梅棹忠夫著作集」全22巻解題：第10巻 民族学の世界

著者	小林 繁樹
ページ	137-137
発行年	2011-03-10
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/4849">http://hdl.handle.net/10502/4849</a>

## 民族学の世界



本巻は、人類学や民族学、文化人類学の目的や内容、研究の視点といった、学問のあり方をめぐる論稿をまとめている。三部構成で、第二部の「人類学周遊」は既刊の単行本の収録、第二部の「民族学周遊」は本書用に編集したもの、第三部は回想録となっている。そのうち前の二部は、人類学や民族学の講義の部分、論文や論説の部分、そして書評などを集めたものと、編成を似通わせている。

その「人類学周遊」のまえがきで、梅棹忠夫自身がこの本は人類学の案内書としたうえで、その多彩さと広がり、おもしろさを感じていただければ、と記している。そうしたねらいは、この巻全体をおしてもいえる。

なかでも一九六六年の「人文学報」に掲載された「文化分析の構想」と、一九七二年の講義を整えた、本書が初出となる「地球科学としての人類学」の二論稿は、梅棹の人類学、民族学の考え方を理解するうえで重要である。

前者は、要素と集合という数学的なとらえ方で、文化を科学的に理解できないかと検討する。後者は、人類の文化について概観する。このなかで、法則を求める手法に用いられる論理を「つらぬく論理」とよび、別に、現象を横につらねて関係認識的に把握するそれを「つらねる論理」として提唱する。一九五四年に刊行されたリンネの分類学を評したフレーズにたどれるようであるが、実証的なフィールド・ワークを重んじる梅棹ならではの観点である。

本書で多く占めるのは、一九九一年までの小半世紀におよぶ間に執筆した書評や序文、推薦文などである。これらはその後、場合によっては本文よりも長い解説と追記がついていて、全体として人類学の書誌となっている。本巻は、こうした部分も含め、第三部の回想録を締めくくりとして、学界を牽引し続けたリーダー自らの筆となる、日本の民族学、文化人類学の歴史書でもある。(小林繁樹)